opusdei.org

## 教皇ベネディクト16 世の就任ミサ説教

4月24日(日)午前10時からサンピエトロ広場で教皇ベネディクト16世の就任ミサが行われました。以下はベネディクト16世の説教の全文の翻訳です。

2005/05/12

来賓の皆様

親愛なる兄弟である司教と司祭の皆 様 各国代表と外交使節の皆様

親愛なる兄弟姉妹の皆様

この数日の大きな緊張を伴う日々の 間、わたしたちは三つの異なる機会 に諸聖人の連願を唱えました。わた したちの教皇ヨハネ・パウロ二世の葬 儀のとき、枢機卿がたがコンクラー べを開始するとき、そしてふたたび 今日です。わたしたちは応唱でこう 歌いました。「主よこの者を助けて ください(Tu illum adiuva)」、す なわち、聖ペトロの新しい後継者を 支えてくださいと。それぞれの機会 に、この祈りが歌われるのを聞いた とき、わたしは特別な意味で大きな 慰めを感じました。

ョハネ・パウロ二世が逝去された後、 わたしたちは皆、どれだけ寂しく感 じたことでしょうか。教皇は、26年 以上にわたりわたしたちの牧者とな り、わたしたちの人生の旅路を導い てくださったからです。教皇は来世 の入口を通り、神の神秘に入ってい かれました。

しかし教皇は、ただひとりきりでこ の道のりを歩まれたのではありませ んでした。信じる者は、この世で も、死んでからも、けっしてひとり きりではありません。かの葬儀のと きに、わたしたちはあらゆる時代の 聖人たちに呼びかけることができま した。彼らは教皇の信仰における友 人であり、兄弟姉妹です。わたした ちは、聖人たちが生ける行列をなし て、教皇が来世に至り、神の栄光を 受けるまで、ともに歩んでくれるこ とを知っていました。わたしたちは 教皇の到着が心待ちにされているこ とを知っていました。いまや教皇が ご自分の家族とともに、ほんとうの 意味でご自分の家でくつろいでおら れることを、わたしたちは知ってい ます。

わたしたちはまた、主が選んだ者を 選出するために、荘厳にコンまして、 荘厳に思めを感じまして、 を始めたときに慰めを感じまたもして、 の者のようにして、 の者を見分けることが、 のでしょうか。 あらゆる文化が、解して、 主が、 のようにして、 から来た115名の司教が、解して、 を委ねようと望まれた者を見いできたのでしょうか。

わたしたちはひとりきりではない

あらためて、わたしたちは、自分に もがひとりきが、神の友にはないなります。 自分たちが、導かれているはいる はないるまれ、導かれていまい。 はたちは間に、が、けないまいた としてであるのわたしないない。 ないのかとはないないない。 ないのかとはないますがない。 ないあらいまとがであるかしてわたしにそのようなことができ るでしょうか。どうしてわたしはそ のようなことができるようになるで しょうか。

親愛なる友人の皆様。皆様は今、神 が人類と関わった歴史の中の幾人か の偉大な聖人の名を唱えながら、す べての聖人たちに祈り求めてくださ いました。こうしてわたしもまた、 あらためて確信をもってこういうこ とができます。わたしはひとりきり ではありません。わたしは、ほんと うの意味で、けっしてひとりで担う ことのできないことを、ひとりで担 う必要はありません。神のすべての 聖人たちが、かしこでわたしを守 り、わたしを支え、わたしを担って くださいます。また、親愛なる友人 の皆様。皆様の祈りと、ご好意と、 愛と、信仰と、希望とが、わたしと ともにあります。

実に、諸聖人の交わりは、わたした ちに先立ち、わたしたちがその名を 知っている偉大な人びとの間にだけ あるのではありません。わたしたっ 皆が、諸聖人の交したちはりにあず。 いるのではもりたちはそりの名したちはキリストを受けるの名によって洗礼を受いからえい。 た。わたまものたまりのちを血はためからだと自りたます。 たちを作り変え、ご自りたものとしてくださいます。

す。わたしたちは、復活した主が弟子たちに約束した喜びを経験しているからです。教会は生きています。 教会が生きているのは、キリストが生きているからです。キリストがまことに復活したからです。

あの復活祭の日々に、わたしたちが 教皇の顔に見た苦しみのうちに、秘 をしたちはキリストの受難の神傷に 観想し、またキリストのの日々に 観れました。したりはまた、この日かに で、復活したかたはまれること で、ましたかたしたちは短いで きましたかたしたちは短いがの はた。わたしたちは短いで きました。 できました。 できまいを経験することができたのです。

教会は生きている

教会は生きています。このことばを もって、わたしはここに集まってく ださったすべての皆様に、すなわ ち、敬愛すべき兄弟である枢機卿と

司教の皆様、親愛なる司祭、助祭、 教会で働く人びと、カテキスタの皆 様に、大きな喜びと感謝とともに、 ご挨拶を申し上げます。男女修道者 の皆様にご挨拶申し上げます。皆様 はわたしたちの姿を作り変える神の 現存をあかししておられます。信徒 の皆様にご挨拶申し上げます。皆様 は、神の国の建設という、世界中 の、生活のあらゆる分野にまで広が る、大きな課題に取り組んでおられ ます。わたしはまた、洗礼の秘跡に よって新たに生まれながら、わたし たちと完全な交わりをもたないすべ てのかたがたに、大きな愛情を込め てご挨拶申し上げます。そして、わ が兄弟姉妹であるユダヤ人の皆様、 わたしたちは皆様と偉大な霊的遺産 によって結ばれています。この遺産 は、神の取り消すことのできない約 束に基づくものです。最後に、力を 一つに集めた波のように、わたしの 思いは、信仰をもっている人も、信

仰をもたない人も含めて、現代のすべての人びとに向かいます。

親愛なる友人の皆様。今、わたしが 統治の計画を申し上げる必要はあり ません。わたしは4月20日水曜日の メッセージの中で、わたしが自分の 使命と考えていることを示すことが できました。また、それを申し上げ るほかの機会もあることと思いま す。

わたしのほんとうの統治の計画は、 自分の意志を行うことではありまるとではありません。自分自身の考えを実しのというの計画は、全教にないないで、主にもののは、みずすのとが教にしたが教生があるとが教生があるというのを導いて、ものでは、いったというのに、おったがないに、かったがは、かったがに、対して、かったがに、対して、かったがに、対して、かったがに、対して、かったがは、かったがに、対して、かったがに、対して、かったがに、対して、かったがに、対して、かったがに、対して、かったがに、対して、かったがに、対して、かったがに、対して、はいいには、はいいには、はいいには、はいいにはいいにはいいにはいいます。 いられる二つのしるしについて簡単にお話ししたいと思います。また、これらの二つのしるしは、ともに、今日の聖書朗読で読まれたことをはっきりと反映しています。

羊を守るための聖なる熱意

最初のしるしは、パリウムです。パリウムは羊毛だけで織られ、わたしの肩にかけられます。4世紀以来ローマ司教が身に帯びてきた、この昔からあるしるしは、キリストのくずきを表すものと考えられます。神のしもべたちのしもべである、ローマ市の司教は、それを自分の肩にかけます。

神のくびきは、わたしたちが受け入れる神のみ旨です。このみ旨は、わたしたちを押さえつけ、わたしたちから自由を奪う、重荷ではありません。神が求めることを知り、いのちの道がどこにあるかを知ること、これがイスラエルの喜びであり、イス

ラエルに与えられた大きな誉れでした。それはまたわたしたちの喜います。神のみ旨は、わたとは、わたとはないなっている。こうして、わたのです。こうして、わたのです。こうして、いるは神に仕えるだけでならないに役立つもなります。

さらに、パリウムのもつ象徴的な毛はもった具体的です。小者のいまで、あるいは、見失ったす気がまれいない。、主を表します。が、まを高に背負いが荒れ野でといったがで見失ったがで見失ったものから、見失ったものがあるというとものがあるというとものがあるというとものがあるというとものがあるというとものがあるというとものがあるというとものがあるというとものがあるというにはいる。というにはいるというにはいる。というはいる。というにはいる。というはいる。というはいる。というはいる。といるにはいる。といるはいるにはいる。といるはいる。といるはいるにはいる。というはいる。といるはいるはいる。といるはいる。といるはいる。といるはいる。といるはいる。といるはいる。といるはいるはいる。といるはいるはいる。といるはいる。といるはいる。といるはいるはいる。といるはいる。といるはいるはいる。といる

にしておきません。神の子は、人類 をみじめな状態に置かれたま主はをすることができな光を捨ててるました。 大力に出かけ、十字架に羊を同したます。 は、ますでは、おけますでは、ますではいます。 がけますでは、おけますではます。 は、おりしたださいださいたます。 は、だってがいたがらです。 は、よい羊飼いだからです。

パリウムが何よりもまず示している

いることができません。また、荒れ 野にも多くの種類のものがありま す。

貧しさによる荒れ野もあれば、飢え と渇きによる荒れ野、遺棄や、孤 独、愛の失敗からくる荒れ野もあま を 神が見いだせないことの目標 が見いだせなり生の自 が見いだせなります。 だれ野、自分の空しさから味が 感じられなります。内的な意味で だれ野があまりにも広大である だれ野があまりにも広大であるれ野があまりにも広大での世の荒れ野があます。 だいっています。

そのため、地上の富は、もはやすべての者が暮らすための神の庭を築くために用いられるのではなく、搾取と破壊を行う権力のために用いられるいます。全教会とその牧者たちは、キリストのように、民を荒れ野から連れ出し、いのちの地、神のをから連れ出し、からあないのちへあふれるいのちへ

と導くように努めなければなりません。

神の忍耐強さによるあがない

小羊というしるしも深い意味をもっ ています。古代中近東では、王たち が自分の民の羊飼いの装いをするの が習慣となっていました。それは彼 らの権力を表す、皮肉な象徴でし た。王にとって、臣民は、羊飼いが 意のままに用いることのできる羊の ようなものだったのです。全人類の 羊飼いである、生ける神が小羊と なったとき、神は、しいたげられ、 殺される小羊の側に立ちました。こ うして神は、自分がほんとうの羊飼 いであることを現されたのです。 「わたしはよい羊飼いである。・・・・ わたしは羊のためにいのちを捨て る| (ヨハネ10・14-15)。わたし たちをあがなうのは、権力ではな く、愛です。これが神のしるしで す。神ご自身が愛だからです。

わたしたちは、神がご自身の力を示 し、決定的な一撃をもって、悪を滅 ぼし、よりよい世界を造ってほしい と、どれほどしばしば望むことで しょうか。あらゆる権力思想はまさ にこのようなしかたで自らを正当化 します。そこでは人類の進歩と解放 を妨げるならば何でも破壊すること が正当化されるのです。わたしたち は神の忍耐強さのゆえに苦しんでい ます。にもかかわらず、わたしたち は神の忍耐強さを必要としていま す。小羊となられた神は、世が救わ れるのは十字架につけられたかたに よるのであって、彼を十字架につけ た者によるのでないと、わたしたち に語るからです。世は、神の忍耐強 さによってあがなわれます。世を破 壊するのは、人間の性急さなので す。

羊飼いの基本的な性格の一つは、自分に委ねられた民を愛することでなければなりません。もちろん彼は、

自分が仕えるキリストを愛していま す。キリストはペトロにいいまし た。「わたしの羊を飼いなさい」。 そして今、キリストはそのことばを わたしにもいっておられます。「飼 う|とは「愛する|ことを意味しま す。そして、「愛する」とは苦しむ 準備ができていることを意味しま す。「愛する」とは、ほんとうによ いものを羊に与えることを意味しま す。すなわちそれは、神の真理、神 のことばで養うこと、神の現存に よって養うことです。その現存を、 神は聖なる秘跡によってわたしたち に与えてくださいます。

親愛なる友人の皆様。このときにあたって、わたしがいえるのは、このことだけです。わたしのために祈ってください。わたしが主をよりできることを学ぶことができるように。わたしが主の群れをよりいっそう愛することを学ぶことができる

ように。主の群れとは、いいかえれば、皆様であり、聖なる教りであり、皆様の一人ひとりであり、皆様の一人です。わたしが狼をでいるとです。わたしが狼を恐れて逃げ出すことのないようにように近け合いましょう。主がわたちちを担ってくださり、わたしたが互いに担い合うことを学べるように。

## 疎外から神の光へ

と、網はいっぱいになって、引き上げることができませんでした。網は153匹もの大きな魚でいっぱいでした。「それほど多くとれたのに、網は破れていなかった」(ヨハネ21・11)。

イエスの弟子たちとの地上での歩み の最後に語られるこの話は、地上で の歩みの最初の話に対応していま す。そこでも、弟子たちは一晩中か かって何もとることができませんで した。そこでも、イエスはシモンを 招いて、もう一度沖に漕ぎ出すよう にいわれます。すると、まだペトロ と呼ばれていなかったシモンは、驚 くべき答えをします。「先生、おこ とばですから、網を降ろしてみま しょう」。その後、シモンにその使 命が与えられます。「恐れることは ない。今から後、あなたは人間をと る漁師になる| (ルカ5・1 -11)

今日も、教会と使徒たちの後継者たちは、歴史の海の沖に漕ぎ出して、網を降ろすように命じられています。それは、人びとを、福音へとーー神と、キリストと、まことのいのちへと、導くためです。

教父たちは、このただ一つの任務に ついて、きわめて意義深い注解を 行っています。彼らはこういってい ます。水に住むように造られた魚に とって、海から引き上げられ、人間 の食べ物として用いるために、生存 のために不可欠な水から引き離され ることは、死を意味します。しかし ながら、漁師の使命においては、そ の逆のことが真理となります。わた したちは疎外された状況の中に、苦 しみと死をもたらす海水の中に生き ています。わたしたちは、光の失わ れた闇の海の中で生きているので す。福音の網は、わたしたちを、死 をもたらす水から引き上げ、神の光 の輝きの中へ、まことのいのちへ

と、わたしたちを導きます。このこ とは、実際に真実です。人間をとる 漁師となるという、この使命を与え られてキリストに従うとき、わたし たちは、人びとを、さまざまな形の 疎外という塩の味のついた海から連 れ出し、彼らをいのちの地、神の光 へと導くからです。このことは、真 実です。わたしたちの人生の目的 は、人びとに神を示すことだからで す。そして、神が目に見えるように なってはじめて、ほんとうの意味で の人生が始まります。キリストのう ちに生ける神と出会ってはじめて、 わたしたちは生きるとはどういうこ とであるかを知るのです。

わたしたちは、進化の結果、偶然に 生まれた、無意味な産物のようなも のではありません。わたしたち一人 ひとりは、神のはからいに基づいて 生まれたのです。わたしたち一人ひ とりは、神から望まれ、愛され、必 要とされています。福音に驚きを感

じること、キリストと出会うこと以 上にすばらしいことはありません。 キリストを知ること、わたしたちが キリストの友であることを、人に語 ること以上にすばらしいことはあり ません。牧者の務め、人間をとる漁 師の務めは、骨の折れるものだと考 えられることが多いかもしれませ ん。しかし、それはすばらしく、崇 高な務めです。なぜなら、それはほ んとうの意味で、喜びに奉仕するこ と、世の中に入ることを望んでい る、神の喜びに奉仕することだから です。

## 一致への招き、勇気あるあかし

ここで付け加えたいことがあります。羊飼いの姿も、漁師の姿も、ともに、一致への招きをはっきりと示すものです。「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。

こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる」(ヨハネ10・16)。これは、よい羊飼いについての話の終わりに、イエスが述べたことばです。153匹の大きな魚の話も、次のような喜ばしいことばで締めくくられています。「それほど多くとれたのに、網は破れていなかった」(ヨハネ21・11)。

ああ、愛する主よ、わたしたちは 今、悲しい思いで、網が破れている ことを認めなければなりません。け れども、わたしたちは悲しんでいて はいけません。主が与えられた、失 望に終わることのない約束のゆえ に、わたしたちは喜ぼうではありま せんか。そして、主が約束された、 一致へと至る道のりを歩むために、 なしうるすべてのことをしようでは ありませんか。このことを、わたし たちが主にささげる祈りの中でも、 心にとめましょう。わたしたちは主 に願い求めます。そうです、主よ、

あなたがなさった約束を思い起こしてください。わたしたちが一人の羊飼いのもとに、一つの群れとなることができるようにしてください。あなたの網が破れないようにしてください。わたしたちが一致に仕えるしさい。わたしたちすように、助けてください。

今このときにおいて、わたしは、1978年10月22日の、教皇ヨハネ・パウロ二世がその奉仕をこのサンピエトロ広場で始めたときのことを思い起こします。教皇がそのとき述べたことばは、わたしの耳につねにこだましています。「恐れるな。キリストに向けて扉を開きなさい」。

教皇は、この世で権勢と権力をもつ 人びとに呼びかけました。彼らは、 もし自分たちがキリストを迎え入 れ、信仰の自由を認めたならば、キ リストが自分たちの権力の一部を取 り上げるのでないかと恐れていまし た。そうです、キリストは彼らから 奪うに違いありませんでした。腐敗 した支配を、ほしいままに行動する ために法と自由を操作することを。 しかし、キリストは、人間の自由や 尊厳、あるいは公正な社会の建設に 関わることがらは、何一つ奪うこと はありませんでした。

教皇はまた、すべての人びとに、と りわけ若者たちに語りかけました。 もしかすると、わたしたちは皆、あ る意味で恐れているのではないで しょうか。もしキリストが自分たち の人生に完全に入ってくることを許 し、自分自身をキリストに向けて完 全に開いたならば、キリストがわた したちから何かを取り去るのではな いかと、わたしたちは恐れているの ではないでしょうか。もしかする と、わたしたちは、大事なこと、か けがえのないこと、人生をすばらし いものにしてくれることを、あきら めるのを、恐れているのではないで

しょうか。それゆえ、わたしたちは、ついには自分たちの自由が制限され、奪われることになる危険を冒しているのではないでしょうか。

そしてふたたび、教皇はいいます。 そうではありません。キリストを自 分たちの人生の中に受け入れても、 わたしたちは何も失いはしません。 人生を自由で、すばらしく、崇高な ものにしてくれるものを、絶対に、 何も失うことはありません。そうで す。キリストと友になることによっ てはじめて、わたしたちの人生の扉 は大きく開かれるのです。キリスト と友になることによってはじめて、 人間の存在に秘められた大きな力 が、ほんとうの意味で明らかになる のです。キリストと友になることに よってはじめて、わたしたちは美 と、解放された自由を経験すること ができるのです。

(カトリック中央協議会 司教協議会 秘書室研究企画訳) (5.11)

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/jiao-huang-benedeikuto16shi-nojiu-ren-misashuo-jiao/ (2025/12/15)